

# 鯨 研 通 信

第 303 号

1976年11月

財団法人 日本鯨類学会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京 (642) 2888 (代表)



## ヨウスコウカワイルカ

### 研究の背景と分布を中心にして

東京大学医学部 神谷敏郎

齒鯨亜目において淡水イルカ類(4属4種)の存在は、この種のイルカが形態学的に化石鯨にみられる古い形質を多くもつことから鯨類の研究において欠かすことのできない位置を占めている。<sup>3) 6) 7)</sup>

淡水イルカ4種の中、この世に最初に知られた種類はガンジスカワイルカである。その学術報告は1801年であるが、<sup>12)</sup> プレニウス(Plinius. secundus: 23-79)の自然史の水生物物の項はすでに「インドのガンジス河にはプラタニスタと称する魚がいて、イルカの吻と尾を持っているが、大きさは16キュービットである」と書かれている。16キュービットは24フィートにあたるので7メートル以上もある大きな魚(=イルカ)になるが、ネロ皇帝の時代にローマにおいてガンジス河の生物が記録されたのであるから、当時から異色の動物として注目されていたのであろう。本種の学名 *Platanista gangetica* もここから採られている。

これに対して学術報告が最も新しい種類はヨウスコウカワイルカ(*Lipotes vexillifer*)で、1918年にスミソニアン研究所のミラー(G. S. Miller, Jr.)によって「中国で捕獲されたカワイルカの新種」として学界に報告された。<sup>8)</sup> 中国の珍獣シフゾウ(1865)やパンダ(1869)の報告よりもだいぶ新しく、今世紀に入ってからの発見である。

淡水イルカの他の2種、アマゾンカワイルカとラブラタカワイルカについては19世紀中頃に研究が行われている。淡水イルカに関する研究もこの歴史的背景が今日に及んでいて、最も資料が整った研究も進ん

でいるのが *Platanista* で、標本や資料に乏しいのが *Lipotes* である。

#### *Lipotes* の標本

ミラーによって研究された基準標本は頭蓋骨と7個の頸椎である。この標本はミラー自身の採集によるものではなく、1916年2月に洞庭湖でカモ猟をしていた米国人ホイ(G. H. Hoy)によって射止められたイルカで、ホイがスミソニアン研究所に送ったものである。

ミラーの報告に刺激されたのであろう、1921年採集個体がニューヨークのアメリカ自然史博物館に、翌22年採集されたイルカが大英博物館へと、それぞれ1体づつが送られている。今日においても各博物館でこれらの骨格標本をみることができる。

日本は中国とは地理的には隣接しているが、日本に *Lipotes* が持込まれた記録はなく、また日本の研究者が現地で調査を行なったという報告もない。

このイルカの基産地である中国においてはどうかというと、第二次世界大戦前の時点では上海博物館に *Lipotes* の完全な頭蓋骨1点(未成熟個体)と下顎骨1点(成熟個体)とが収蔵されていたという記録が残っているだけである。

この記録は基準標本を採集したホイが1923年刊行の *China Journal Arts and Science, Shanghai* に発表した「洞庭湖の白旗イルカについて」と題する論文の終頁に同誌の編集者のコメントがつ



図-1 ガンジスカワイルカの外形 (Hoy, 1916)  
 ホイが写真からトレースし、ミラーに送ったもの。  
 背鰭の発達がよく、水面から三角形とびでて  
 みえることから中国では“白旗”(Peh Ch'i)  
 とも呼ばれていた。

いていて、その中で紹介されているものである。

### Lipotes の分布と疑問点

本種に関する生態や分布についての報告は極めて限られていて、上記のホイの報告と現地でニューヨーク標本の採集にあたったポーブ (C. H. Pope) の観察野帳<sup>1)</sup>が主なものである。ホイは捕獲時のイルカの観察と漁民の話を主にしてまとめている。資料が不十分なことから、本種の分布域は洞庭湖とその附近の揚子江流域とされてきた。洞庭湖は河口より約 960 km 上流にある。

筆者は最近まで 1923 年に存在していた上海博物館のイルカの骨格が正確に *Lipotes* であったのかどうかという疑いをもっていた。その根拠は 1) 上海は揚子江河口デルタにあって、地理的に河のイルカよりも海のイルカの方が持込まれる可能性が多いのではないかと 2) 学界に新種として発表された珍しいイルカの標本が、学術文化の中心である北京や南京を飛び越して上海にのみ保存されていたこと 3) ホイ論文に追加されている編集者の記事の内容が必ずしも正確でない という 3 点からである。

3) にあげた追記事の内容というのは、「*Lipotes* が新種として認められてから後、この注目すべきイルカが大英博物館に 1 頭、アメリカ自然史博物館に 3 頭送られた。またこの他に上海博物館に 2 点の標本が保存されている」というものである。当時ニューヨークには確かに洞庭湖産のイルカ 3 頭が届けられたが、ポーブの野帳によるとその内訳は、1 頭のみが *Lipotes* で、他の 2 頭はスナメリであった。このことから編集者のコメントにはややはしゃぎすぎがみられ、事実を正確に伝えているとはいえない。したがって上海標本 2 点についてもそのままのみにしてしまつてよいのかと疑問に考えていた。最近まで疑問を抱いていたと断わったが、それでは現在ではどうかという点が本稿の本題となる。

### 南京と上海で捕獲された *Lipotes*

第二次世界大戦後の中国での *Lipotes* に関する研究報告に筆者は強い関心をもって文献を探していたが、最近まで文献を探し出せなかった。というよりは見落している、次の重要な論文が 20 年も前に発表されていたことを最近になって知った。

- 1) 黄文凡、陸敏鳳：上海虎丘路博物館獸類標本鑑定報告。復旦大学第三屆科学討論会上の報告、1956。
- 2) 周開亜：在長江下游發現的白鯨豚。科学通報 1950 年兌、21~22 頁、1958。

である。このうち筆者が入手し得たのは 2) の周論文で東京大学農学部図書館でみつけることができた。1) については末だ手がかりを得ていないが、1) 中の *Lipotes* に関する項目の概要が 2) の論文に引用されているので、大要はつかむことができた。

周開亜論文は 1 頁と 5 行の短報ではあるが *Lipotes* の分布が南京から上海までの長江 (揚子江) 下流域にまで広がっている点を明らかにした注目すべきものである。

論文の要旨をまとめて紹介してみると、1956 年 12 月に南京近在の漁民が長江で捕獲した“怪魚”とって 1 頭の *Lipotes* (雄、体長約 150 cm、体重 72 kg) を南京師範学院生物系に持込ってきた。さらに翌 57 年 8 月にも南京近在の漁民によって雌の個体 (206 cm、55 kg) が捕らえられ、計 2 頭の *Lipotes* を調べることができた。

本種の新鮮時の体色は背側は浅藍灰色、腹側は白色である。脂皮の厚さが冬期のイルカでは厚かったが、漁期のイルカはやせていて脂皮は薄かった。

この論文にはイルカを左上より撮影した外形の写真と頭蓋骨を左側面および背面より撮した写真とが載っている。この他、外形や頭蓋骨についての所見も書かれているが、その内容はすでに発表されている所見<sup>2) 3) 4)</sup>と重複するのでここでは省略する。

周開亜は南京で 2 頭の *Lipotes* を観察したあと上海虎丘路博物館に赴き、黄と陸によって同定<sup>10)</sup>され同館に保存されていた 1 頭の雌の *Lipotes* の標本と 1956 年に採集された本種の雌の標本とを観察した。またこの 2 頭のイルカが 1953 年の秋と 56 年の冬にそれぞれ上海附近で購入されたものであることを確認し、*Lipotes* の分布が従来の報告による洞庭湖を中心とした長江中流域から下流の上海流域にまで広

く分布していることを明らかにした。



図-2 長江(揚子江)の流れ

中国経済動物誌の獣類編(1964年版)にも *Lipototes* についての解説が、主として周開重論文を中心にして載っている。分布についても上海流域にまで及んでいることと、また中国最大の湖である鄱陽湖でも *Lipototes* に関する伝説が伝えられているがその存否は今後の調査をまたねばならぬと書かれてい

る。さらに中国にしか生息していない *Lipototes* を充分保護する必要性が説かれている。

1974年11月に東京大学海洋研究所の西脇教授は中国を親善訪問され、その折に上海と武漢にて *Lipototes* に関する情報収集と標本の観察を行った。

西脇私信によると、上海自然博物館にて *Lipototes* について責任者に尋ねたところ、1923年の標本は行方不明であり、またその時点では他に同館に保存されている *Lipototes* の標本はないという回答を得ている。この点は、黄と陸論文および周論文で取り上げられた2点の標本の行方も不明となってしまう。20年前の1953年と56年の採集の標本であり、その後の機構改革や中国内での他施設との標本交換等による移動も考えられるが確認を必要とする点である。

一方、武漢水生生物研究所には2頭の *Lipototes* の標本が保存されている。a) 剥製標本(雌、253cm、91cmの胎子を妊んでいた)と b) 全身が薬液中に保存されている標本(資料不詳)とで、この他にa)の内臓が別に液浸標本として保存されていた。

雑誌「人民中国」: 7(1975)には北京自然博物館の紹介グラビア写真がのっていて、その中に *Lipototes* の剥製標本を仕上げている写真が含まれている。

表-1 ヨウスコウカワイルカの標本所在

No	標本保存地	採集年月	性	体長 (cm)	体重 (kg)	報告者又は記載雑誌	備	考
1	ワシントン	1916年2月	♂	228.5	135.0	Miller('18) Hoy('23)	基準標本、外形写真あり頭蓋骨と頭椎骨(USNM 21893)	
2	ニューヨーク	1921年12月	♀	202.0		Pope('21)	全身骨格標本(AMNH 57333) 記録には内臓器官も保存されていたとあるが現在では行方不明	
3	ロンドン	1922年1月	♀	208.0		Hinton & Percraft('22) Hinton('36)	全身骨格標本(BMNH 22-6-22-1)と全身鋳型標本がつくられたが、全肋骨、前肢骨、腰骨が紛失、外形写真完備	
4	上海	不詳				China J.Arts Sci., Shanghai('23)	頭蓋骨(未成熟個体)	
5	上海	不詳					下顎骨(成熟個体)	
6	上海	1953年秋	♀			黄と陸('56)		
7	上海	1956年冬	♀					
8	南京	1956年12月	♂	150.0±	72.0	周開重('58)		
9	南京	1957年8月	♀	206.0	55.0			
10	武漢	不詳	♀	253.0	237.0	西脇('74)	剥製標本、内臓器官の液浸標本あり。91cmの胎子を妊んでいた。	
11	武漢	不詳					全身液浸標本	
12	上海	不詳				周達生('76)	剥製標本	

1976年夏、周達生氏は上海自然博物館にて本種の剥製標本を観察している。<sup>14</sup> 西脇私信と併せ考えるとこの剥製標本は比較的最近になって入手、展示されたものであろう。

1916年洞庭湖において*Lipotes*の第1号標本が捕獲されてから今日までの60年間における、研究報告および他の資料から確認のできた標本の所在をまとめてみたのが表-1(標本保存地は、1953年以降は報告時のもの)である。

## あ と が き

*Lipotes*を世に始めて紹介したミラーについては、1959年のJournal of Mammalogy に経歴、研究業績また人柄についても紹介が載っている。ミラーはスミソニアン研究所に42年間勤務し、生涯に400編の論文をまとめている。その研究対象は昆虫類から化石人類まで、哺乳動物全般に亘るものが含まれている。鯨に関連しては12編の論文が書かれているが、このうち2編の論文が有名である。*Lipotes*の同定と、1923年発表の「鯨類頭蓋骨にみられるテレスコーピングについて」と題する論文とである。<sup>9)</sup> 後の論文は歯鯨類の頭蓋骨の複雑な構造を理解するための考え方として、頭蓋骨を構成する骨と骨とが蛇腹を縮めた時のように重なり合って組合さっているという特徴を捉えた仮説を提唱した格調高い論文として知られている。

新中国からの2篇の論文によって、中国においても鯨類の研究が着々と進められていることを知り深い感銘をうけた。近い将来により一層の学术交流が促進され、より多くの文献や標本の交換ができることを願っている。

周開亜論文をはじめ新中国での鯨類に関する論文の所在を教示して下さった、神戸中華同文学校の周達生氏に厚く御礼申し上げる。周氏は中国に数回旅され、中国の自然や動物についての解説や中国各地の博物館や動物園の動静の報告等を通じて自然史の分野で中日の文化交流に尽くされている方である。

1927年に指摘された*Lipotes*の上海標本について筆者が抱いていた疑問は、本種が上海付近にまで分布している事実が明らかになった現在、この勝負は棚上げになってしまった。標本の観察があつてはじめて決着のつけられる問題だからである。

## 参 考 文 献

1. Brownell, R. L., Jr. and E. S. Harald: *Lipotes vexillifer*. Mammalian species, No.10, 1-4, 1972.
2. Hinton, M. A. C.: Some interesting points in the anatomy of the fresh-water dolphin *Lipotes* and its allies., Proc. Linn. Soc., 148th sess., 1935-6. 3:183-185, 1936.
3. Hinton, M. A. C. and W. P. Pycraft: Preliminary note on the affinities of the genus *Lipotes*. Ann. Mag. Nat. Hist., ser.9, 10:232-234, 1922.
4. Hoy, C. M.: The "white-flag dolphin" of the Tung Ting Lake. China J. Arts Sci., Shanghai. 1:154-157, 1923.
5. 神谷敏郎:淡水イルカを追って. 自然32(1), 56~64, 1977.
6. 粕谷俊雄:カワイルカ類とその生態. 動物と自然3(1), 4~8, 1973.
7. ———:世界のカワイルカ(1)と(2). 鯨研通信(273) 33-36, (274) 43-49, 1974.
8. Miller, G. S., Jr.: A new river-dolphin from China. Smithsonian Misc. Coll. 68(2486): 1-12, 1918.
9. ———: The telescoping of the cetacean skull. Smithsonian Misc. Coll. 76(2720): 1-71, 1923.
10. 黄文几、陸敏鳳:上海虎丘路博物館鯨類標本的鑑定報告. 復旦大学第三屆科学討論会上的報告. 1956.(文献13.より引用)
11. Pope, C. H.: White flag. pp. 177-183, in China's animal frontier. Viking Press New York, 192pp, 1940,(文献1より引用)
12. Roxburgh, W.: An account of a new species of *Delphinus*, an inhabitant of the Ganges. Asiatic Researches 7:170-174, 1801.
13. 周開亜:在長江下游發見的白鱘豚. 科学通報19 58号、21~22, 1958.
14. 周達生:上海自然博物館. 自然32(1), 124, 1977.
15. 西脇昌治:最近の中国における*Lipotes*の標本と資料.(私信)

## 鯨 史 巷 談 (四)

### さ め の 目 鯨 話 (前・後)

#### 熊野の背美と生月の背美

黒潮資料館 矢代嘉春

#### 背美鯨突獲り三件

覚めた目で見ると、というカッコいゝ言葉を新聞雑誌でチョクチョク見るナ。センスのいゝ表現ではないか。理智深い目で見直そうという品のいい言い廻しなんだろう。これが巷談師にかかると「寝ぼけるない、面を洗って出直せ」となるんだからひどい。覚めた目と鯨の目の違いだ。

鯨の目というのはちいさくて可愛いくて童眼というのはいだね、人を疑う事を知らない。彼等は一体どのような目で人間を見ているのだろうか。いやそんな深刻な話はやそう。近頃乱読した資料から何と網でなくては獲れぬ筈の背美鯨を銜だけで獲っている記録を三ヶ所で発見した。然もそれが網獲りの創始者である熊野灘の太地組と古座組それに九州の生月島関係である。覚めた目いや鯨の目のよってきたる所以だ。では紀州関係資料から。

#### 〔前編〕熊野太地網代の背美鯨

##### 古座浦絵巻奮戦図

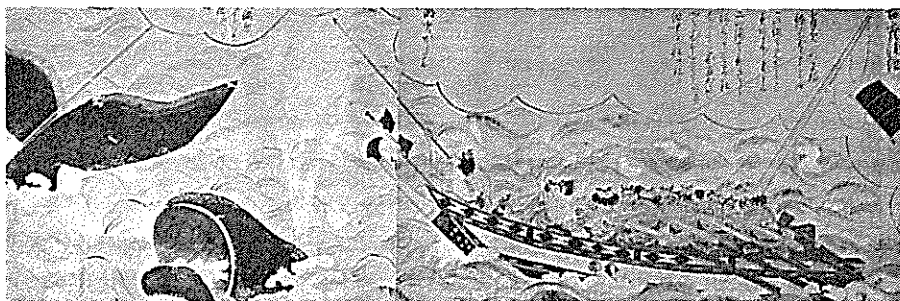
鯨にかぎらず、何の魚でも銜で突ける時には銜を、網でなくてはならぬ時には網をと、いう事は仕事のコツで、いつもあのバカでかい網船をノロノロ連れて歩かなくてはならぬとは網獲り時代を

信奉する実証史家が経営する場合だけだろうなどと皮肉は別として紀伊半島の突端串本港の手前古座浦鯨絵巻から見て戴こう。と言っても、原本は文部省史料館に秘蔵されている。大井線の奥なんだから簡単には参らぬ、然し幸に例の大著熊野太地浦捕鯨史の附録絵巻の第四巻がその複写だ、これで十分用が足りる。

この絵巻の成立を同著者からそのまま借りておこう。わかりよくていゝ。

##### 古座浦鯨絵巻

古座浦の鯨方は寛文二年(一六六三年)和歌山藩の管轄のもとに開始された(一説に万治末年)、太地浦は自主経営乍ら大きな成果を収めていたので藩は熊野沿岸に数々の鯨方を設立した。古座鯨方は中でも早期に設置されたものの一つである。同領地内の太地捕鯨方がこれに協力したことはいうまでもない。江戸中期以降は一般に不漁がつづいたので藩管轄の鯨方の中には休止するものが多く、古座鯨方は再三太地浦鯨方指導のもとに合併経営された。この絵巻きは江戸後期の作品と想像される。その時代は太地との交流も密接であったのでこゝにあげられている鯨の種類は太地浦のものと同様であったと思われる。下略。ここで驚くのは



古座浦鯨絵巻。

背美の子持ち鯨を突きたる体(文部省史料館蔵)

この絵巻の中心場面が間違いなく背美鯨の銛獲り図録である事だ。網獲り時代をつくりあげた太地網代の有力鯨方が江戸後期に然も背美を銛だけで突いて獲っているのだ。そこで巻を開いて実況場面を見て戴く。そこには既に刃刺船が一の銛を打ち込み、二の銛が正に打たれようとしている。その画の上部に書かれている詞書きを見よう。

古座浦組

背美の子持ち鯨を突申たる体

一の銛は見出しにて

魚おとなしく突申し候

二の銛は魚さどく

船を逃げ申故早船

なくては突留かたし

必ず突印を高くあげ

組中の船を招く

画面では鯨が頭を出し、その詞書きに「子潮を吹き出したる体」とあり、母鯨は巨大な尻尾だけを見せそれには前の銛網がひかれている。詞書きに「母銛をあてられ底に入る体」とある。

漁獲図はこれで終りあとは鯨体図十一頭分が画かれしめくゝりとして

右図絵之儀は古座浦方にて年来取揚申鯨其魚々の形を直に書写申候云々

とあり、年月の無いのが残念である。

此の図をもうすこしくわしく見れば筋骨たくましき船頭格の壮漢が、突印の帆柱を全力こめて引きあげていて、竿頭には既に旗がはためいている。

この旗に定めがあり、こゝであげるのは小印又はピラピラと申候とあり「三番より以下の船一本づゝ所持仕候、何鯨によらず一の銛突き候時、此の印を柱に高く立申候 沖合船（総指揮船）の突印もこれにて御座候」とある。

一番船二番船は背美を突いた場合大印というのを立てる事になっているが此の船には立っていない。絵巻だからこれ以上のことはわからないが古座浦と言えども背美を獲る場合時によれば突き獲りだけで獲るといふ事がたくまず説明されている。

ではその時によれば——というのは？、それ以前にもう一景見て頂こう。

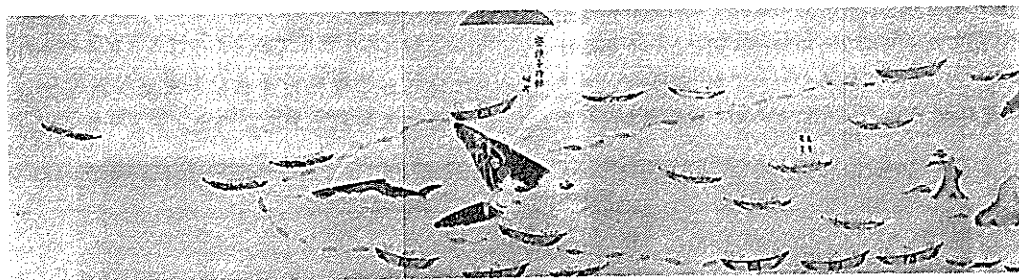
太地浦でも背美を銛で獲る。

同じ太地浦捕鯨史附録の巻参の参を開いていただく。題巻は太地浦捕鯨絵巻である。

この絵巻は東京国立博物館蔵、弘化四年（一八四七）仲秋和歌山に於いて青陽軒幽山画と後書きにある。もう幕末だ。

座頭子持ち網かけ

これは五景よりなり第二図と第三図が捕鯨場面である。第二図は「座頭子持ち網かけ」と題名がつけられ羽刺船の倍もありそうな網船が八隻も画かれ浮木もばかばかしく大きいのが特に目につく。子鯨は既に銛を負い親が必死でこれを追う。親鯨には網がかぶせられ狂乱のていである。子持ちの場合は子を先きに突き、殺さずに泳がせておく。愛情深い親は子の生きている間は何日でも廻遊してくるといふ（平戸森信義氏実見談）、まだ無邪



太地捕鯨絵巻。座頭子持ち網掛

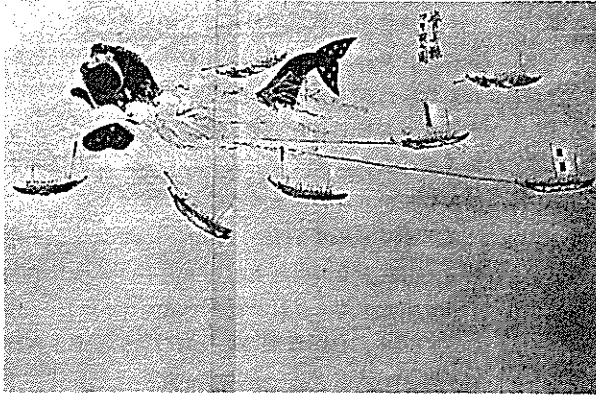
気なので銛だけで獲れるので此の図でも網をかぶっていない。鯨の生態がたくみに語られている。

背美の突獲

さて場面はかわって第三景は「背美鯨ツキ取り之図」と題名がつけられている。

前図にあれ程強調されていた網船が全く見えな。十一隻の羽刺船が巨大な背美鯨に銛をとばせ十数本が突き立っている。一番船と二番船は既に銛網を鯨に曳かせ意気揚々に突印を立てている。手前の二隻は網をとばせようとしている。

こゝでよく見ると早船に結ばれた矢縄（十四巻第五景船図参照）七八条が押波に見えかくれしそれにはクマヅラ（葛かづら）がつけられていて古書に見える早船の使用方法が間違いでない事がよくわかる。



太地捕鯨絵巻。  
背美鯨ツキ取え図（東京国立博物館蔵）

さて問題はこの場面である。作者幽山はあきららかに網掛け法と突取法を意識して画き分けている。

つまり背美鯨といえどもこうして船だけで獲る場合もあるという証明である。この製作年代は前にもふれたように幕末の弘化四年仲秋である。画いたのは仲秋だが突見したのは春の盛りであろう。第二景の灯明岬の岬は満開である。

そこで思い出すのは、当館報六号（一九頁）の一春組にありては突くを専らにする故網をかぶらず突留めれば一番より四番まで褒美を得さすなり。春は鯨さかりて群れ立ちものにおそれず網にかゝりかねる故突を専らにするなり

（勇魚取絵詞）より

である。

この絵巻きは正に春らん満、さかりのついた背美鯨が彼女に夢中になっている処を、急所に一本打ち込まれこけ（後述）させられてしまったのだろう。普通だと五十本も百本も早船や羽が林立しているのに十五六本で仕止められている。子持ちでないのでたしかに雄だ。鯨絵巻の作者は多く子持ちを畫きたがる。こゝでも雄を意識してのことだろう。

この背美突獲りについては証言がある。それは他ならぬ太地網組の作家太地五郎作氏の書かれた

太地浦捕鯨の話（昭和十二年）で、氏は直接自家の羽刺から実話を何度も聞き取っていて、晩年は町長迄やられた程の方だから信憑性は十分。その部分をうつさせていただく。

一背美鯨は巨大勇猛の割に捕り易いこともあるが、又時としては手に負えぬもので明治十一年冬の如き捕鯨開始以来の大悲惨事を惹起する一。

その捕り易いというのは先に申しました手羽がちいさい為で網にかけなくとも船を一本入れると倒けるといって失神状態になり進むことも退くこともせず一ヶ所にてバタバタ暴れている。この機会に船を突くのである。処がこけさせるには船を打つに一定の場所があって急所以外に船を突いた場合には急速に沖合に逃走する。

その急所というのは腰の上の方にセビという所がある。その下部の所である。所が其急所に船が入ると今度は反対に覚醒

して直ぐに逃げ出す。

此の時の勢は頗る急にしてとても追撃を許さない。倒けたる時に船を入れる事の出来ない所が二点ある。それは急所の他に頭部（頬べた）である。これに船を入れるとすぐ正気づいて逃走しるのである。

うまく倒けさえすれば網を用いなくとも捕ることが出来るのである。 下略

（五十二頁六鯨の事より）

## 〔後編〕生月島の背美鯨

### 司馬江漢の周辺

司馬江漢という人は調べれば調べる程面白い。日本人ばなれの名前だから帰化人系の出かと思つたらチャキチャキの江戸っ子で姓は安藤名は吉次郎芝新銭座の生れだ。十四の時に父に死に分れ母親に育てられ、画家だったらしい叔父の影響を強く受けている。

司馬というのは芝の生れだからで名は本人の曰く「予が先祖は紀州の人なり。紀の國に日高川紀の河の大河あり。洋々たる江漢は南の紀なりと、故に号となす」となんだかワケのわからぬことを言っている。

自分もおかしいと思ったのだろう「その後如來

先生に逢いしに江水淡水とて一水の名なり、これを合せて名としたると笑ひけり、何人知られければ江漢としておきぬ」と人を喰ったことを言っている。

彼は銅版画の開拓者として余りにも有名だが捕鯨を実際に見たのは此の人だけじゃないかという気がする。あとの連中は多く現地人からの聞き書きだったり、その子引き孫引きが殆んどの様気がする。

仙台の有名な儒者大槻清準も江漢と同じく松浦侯の接待を受け、生月島に渡って益富組に数泊しているが船にのつたのはいいがシャチにつかれ鯨は逃げ実際を見る事が出来なかった。

この旅で成った有名な鯨史稿の第六巻は木崎悠軒の肥前州産物図考(天明四年八冊)や唐津捕鯨図説に出ずと自書してある。

昨冬押しつまった十二月二十四日県立中央図書館の前館長菱田忠義先生から富津市誌資料調査中地元飯野藩郷医の里見騰雲という人の捕鯨絵図の写本があるからと言われ目の色かえてとんで行ったが調べて見ると江漢日記の写しであった。

又、昨冬鳥羽の海の博物館の中田四朗前三重大教授から志陽略誌の捕鯨部分が木崎悠軒の肥前産物図考のうつつであり驚いておられたが成程紀州の郷土誌に九州の記事が出て来たたらおどろくだろう。

然しこんなことは珍らしくなく、千葉県勝山の鯨組捕鯨史は多く福山順一氏の昭和十八年に書かれた「捕鯨界の先覚者鯨組新兵衛」なる史談小説を拠典としている。然しこれは戦時用に書かれた鯨組伝記であり資料と言え程のものでない。その一〇頁を見ると

「こゝで行われた網取式捕鯨法というのは日本在来の捕鯨法で人員を階級別に見ると沖合親仁、網戸親仁、大網船頭、船頭、羽刺、トモ押、狩棒叩、魚見、漁夫という順序であった——下略。と関西の網獲法をそっくりそのまま持って来ている。鯨獲りのチャンピオンがこんな馬鹿なことになってしまった。船頭、羽刺は別として他の役名を勝山の旗頭連中に聞かせたらあきれ返るだろう。

そこで出刃庖丁を持って鯨に取りつき水中に於いて鯨の下を潜りぬけなぞと大デタラメを書く

然し考えて見ればそう簡単に捕鯨の実際を見る事は出来ないもので、やむなくよその場面を借り

てくるのだろう。然し、同じ業態のを借りて来て地元とよく照合し、組みかえればまあ小説だから我慢するがこれを資料に使うとするなら、そのへんの見きわめをはつきりしなければならぬ。

### 江漢千才一遇

ましてや江戸時代で紀州はふろか九州の果ての捕鯨の実際だ。偶然以外にはない。その偶然に江漢はぶつかったのだ。然も此の時季には三回しか獲れたことのない背美鯨の突獲り場面である。

これには私自体おどろいた。春の背美ならともかく冬の背美は網でないが無理の様だ。よほどうまく倒けさせたのであろう。

さて彼が長崎に遊んだのは天明八年五十二才の春。四月廿三日江戸をたち翌寛政二年四月十三日中山道をまわって江戸に帰った。

その間十二月四日平戸から生月島に渡り十六日に捕鯨の実際を見、一月四日益富の子息亦之助と同舟して生島を発し油水という処へ舟を寄せ田助浦の益谷という家に泊る。こゝで彼は亦之助と一緒に山を買い何とも面白いが道草喰ってはられない、鯨獲りの項を引き写そう。

十二月十一日 時雨風烈、至て寒し、亦之助の言ひ。此氣候必ず鯨岸に寄るとぞ。此の日仏事とて……下略

十二月十二日 風雨寒し、必ずこのあらしの後鯨来る由。此の節鯨魚の漁あり。鱒刺身の如く切りて……。

十二月十三日 天気になる。鯨見ゆると言ひ。鯨舟にのる、舟子六人にして櫓を押す。走ること真に矢の如し。……タカマツ潮を吹く、タカマツ来りては鯨居らず。それより生月の方え漕ぎ寄せて帰りけるにさて鯨舟は舟べりをとんと頻りに打つ事なり。その音海底にひびきて鯨を驚かすなり。舟中より地続きの方を望むに……。

十二月十四日 また雨ばらつく。新四郎方へ松本にて見し芸者来りて、見物に行く。穂の曲、力持皆感じける。

十五日、天気、新四郎頼みの牡丹の面出来上る。夜に入り三人して狂言など大笑いする。下略 玄海灘の孤島の生活も中々にたのしい。彼は此の旅でどこへ行っても席画を書いている。一ケ年の旅中百枚以上になるかも知れない。

さて、愈々千才一遇の日が来た。

十二月十六日 天気。朝起ると鯨来ると知らせ

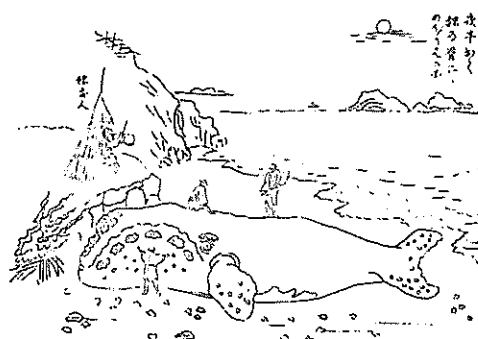


る。吾等此の間にこり(前回ひどい船酔い)鯨船に乗るまじと思ひしに「さァさァ」と促り立てければ飯に水を掛け一椀食い夫れなりに舟に乗る。乗るが早いか、櫓を押すがはやいか、真に矢の如し。彼方此方と漕ぐ。鯨何方えか行きて見えず。故に舟を生月え返さんとする時に沖の方にて頻りに旗を以て招く。晩七時頃なり。朝より一椀の飯のみにして舟にもまれ、舟心地して気分悪しく然れども舟は大鯨の方えと八丁櫓にして飛ぶ如く、掛け声は「アリアリヤアリアリヤ」と走る。気分以外に悪しき故銚につきたる網の内に伏す。凡そ四里程も走りたる時、首を揚げ見るに鯨浪の中より踊り出て潮を吹きまた海底に入る。その廻りに舟七八艘取り捲く、主人亦之助「鯨取れたり取れたり」という声に気分バキと快く成り、見物するに銚に柄あり網ありて舟を鯨の背にのり付けるが如く、鯨をへだつこと僅かに二間三間なり。此の鯨銚十七本を打つ。故に十七艘の舟を引く。

次第に鯨弱りて潮を吹かずして気のみ吹く。茲に於いて芻というものを打つ。舟三艘づゝ鯨の左右に在りて打つ事数度なり。茲に於いて鯨大いに弱りたる時一人鯨の頭の潮吹きを処え登り手に刃と大綱を持ち、ここに穴をうがち其綱を通す。

鯨は其間に幾度となく海に入りたり。又現れたりす。また一人は海へ飛び入り大綱を持って鯨の腹の方え廻りて鯨を吊りあげるなり。此の働き真に危きこと言わん方なし。それよりして舟二艘に丸太を二本横に渡して鯨を吊り、その舟を引舟とす。鯨死せずして共に鱗を動かして岸に着く。これを持叉という。鯨沖にて死する時は沈みて浮かばず。之を死銚と言う。故にこの掛引むづかしく、我等が船は先に帰り、鯨は夜の四時前に着岸す。こゝは三崎とて鯨を解く処なり。宅より一里東の方なり。

「この鯨はまことに先生に見せん為に取れたる」と主人亦之助云えり。いかんとなれば大潮なれば鯨こゝに寄りたり。又夜に成りたれば明朝切り解く事なり。この時節に得ること此の鯨に兩三度に過ぎず。鯨「セミ」とて第一番の上品なりとぞ。鯨番に申しつけ、今夜九時に起すべしと。それより納屋に泊る。一寝入りする。果して番人声をあげておこす。出で見るに満月照して潮引いて鯨全身を現し、大きき十五間



夜半出て鯨の背にのり見る図

の背美鯨なりき。

十二月十七日 朝七時頃より人数数十人タイ松を照らし鯨を解く。各長刀の如き物を持って鯨の背に上り断ち切る。先ず兩腮を切り落し、頭の上を切る。それより尾の方を切り、又背を切り、兩脇を切り落す。頭を切りて各々万力車にて引くなり。

それよりしては腸骨に至る。人夫納屋に運ぶ。肉納屋、骨納屋、腸納屋あり。又大工小屋、鍛冶小屋、桶屋小屋、舟大工小屋あり。さて鯨の肉骨を納屋の内にて数十人の人にて細かく切り大釜に入れて油を煎す。十七かまどあり。前に大桶あり。土蔵の内へ流す。背美鯨十間余の物、油二百樽、金にして四百兩なり。鯨すたる処なし。骨煎じたる殻も砂糖の中に入ると言ふ。筋は磨弓弦に成るなり。口にある鯨これ鯨の鱗(ひげの間違いか)と言って色々細工物になる。たゞすたるものは耳骨のみ、これ大きき六七寸シャコ貝の如き物なり。予二つ三つ拾って持ち帰りぬ。此の日鯨の来ること二度なり。各得ず、大魚と言えども大海にて小魚の如し、十度に一度得る事かたし。晩景舟にて本宅へ帰りぬ。十八日以下略

さて熊野は太地網代二景、生月島一景、計三例の背美鯨の突き獲り実況を見て来た。それもむづかしい特殊な文献からではない。捕鯨史を口にす程の人なら見ていなくてはならぬ資料である。それなのにどうして延宝三年以降網獲りに一変させてしまったのか。

成程太地組は財閥だから網獲りにかわったろう。然し太地網代には他に十組近くの突組がある。この存在をどうする。

ましてやそれ以东伊勢湾周辺には何十ヶ所と突組があり、各組間に突組の鯨法が遺存する事は当館報四号にも六号にもくわしい。

太地網代というのは西は古座浦の向い大島の檜野崎から熊野川口の新宮迄さす。太地組即太地網代ではないのだ。このことさえ本来の鯨史学者は知らぬのではないかとカンگریたくなる。

まァそれはいゝとして、とにかく江漢日誌は捕鯨史にとっては貴重でありそして面白い。名は体を現さず誠にザックバラんな口語体でかくしごとでも平気で書いている。春信の浮世絵の擬作をや

って威ばつたり長崎ではとうとう坊主になつてしまった。唐人屋舗や蘭館に出入りする便法がある。

生月島からの帰り、田助浦で山を買つたりしていることは前に一寸筆をすべらせた。江戸迄に十回以上も山を買っている。

えったいへんな理財家だって、私も当初彼は大阪の豪商木村兼霞堂とは特にうまが合っているのて所謂町人学者の部類かと思ひ調査したが山林所有者だという事実はどこにもない。

よくよく読みなおしたら山は山でもオのつく山でこれ以上知りたかったら西遊日記をよみたまえ。本誌編集長はうらわかき美人だからその処を引き写すわけには参らぬ。残念でした。

ぶ つ く す

- 36) ベリコビッチ, ベー、エム、及びエヌ、エイ、ドウプロフスキー, 1976  
鯨類の感覚器官。ノウカ、レニングラード, 204 pp
- 37) ヤブロコフ, エー、ペー、及びエー、ゲー、ユスロフ, 1976, 進化論  
ブイスジャヤ シュコーラ, モスクワ, 335 pp
- 38) 鳥羽海の博物館 1976, 海と人間(特集鯨漁)4, 64 pp
- 39) Pilleri, G.(ed.), 1976. Investigations on ceatacea. Vol. VII.  
Der Bund, Berne, 151pp.
- 40) Yablokov, A.V. 1974. Variability of Mammals. Smithsonian  
Institution, Washington, 350pp.
- 41) Leatherwood, S., D.K. Caldwell, and E.W. Howard, 1976. Whales,  
dolphins, and porpoises of the western North Atlantic.  
a guide to their identification. NOAA Tech. Rep. NMFS CIRC-  
396, 176pp.
- 42) Scoresby, W. 1969. An account of the Arctic regions, and of  
the whle-fishery. David & Charles, Newton Abbot, 574pp.
- 43) Lipps, J.H., and E. Mitchell, 1976. Trophic model for the  
adaptive radiations and extinctions of pelagic marine  
mammals. Paleobiology 2(2):147-155.